

早稲田大学大学院政治学研究科

2019 年度修了生と博士号取得者に贈る言葉

修士課程を修了した皆さん、博士号を取得した皆さんに、心からお祝いを申し上げます。そして、彼や彼女達をいままで支えてこられた、父兄、親族、友人の皆さんにも、心から感謝申し上げます。

残念ながら、新型コロナウイルスのパンデミックによって、私たちは修了式の開催を断念しました。その結果、皆で一堂に会して、杯を交わして喜びあう機会は失われました。断腸の思いです。

以前にも私たちはおなじ経験をしています。9年前の3月11日に東日本を襲った大震災の後のことでした。当時、学位記は直接手渡すことができましたが、卒業式、修了式、そしてそれを祝う会は中止されました。その時も私は研究科長でしたが、まさか再びおなじ事態に直面することになるとは、思いもよりませんでした。悔しくてなりません。

しかし、修了式があろうがなかろうが、学位授与式があろうがなかろうが、皆さんが達成した学術的成果に変わりがあるはずがありません。ウイルスに水をさされた思いはあるでしょうが、皆さんは、いま成果を獲得されたことに喜びを感じておられると思います。目の前に太い道と大きな空が広がっているという感覚が、多くの皆さんの胸の中に湧き上がっているだろうと思います。

数十年前に学位を取得したとき、私もそのようなイメージで心が膨らんだことを覚えています。死んでも学位を取ろうと命がけで勉強してきたのに、留学先のイギリスから日本へ向けて離陸する飛行機の中で、急に命が惜しくなったのを覚えています。「自分の前に未来が輝いているのに死んでたまるか、落ちるなよこの飛行機」と。

いま思い返すと、学位を取得した喜びの半分は、実はそれまでに味わった葛藤と不安と辛苦を乗り越えたという喜びだったことがわかります。皆さんもおなじなのではないでしょうか。テーマを決めて研究へと飛び出したけれど、着地点は見えない。どこかで失速して落ちてしまうのではないか。見えない壁にぶち当たって、砕け散ってしまうのではないか。自分のやっていることに、ひとかけらの意義もないのではないか。そんな気持ちを全く持たずに今日を迎えた人など、皆さんの中にはいないはずです。

何度倒れそうになっても、そして実際に倒れても、まだ歩けるまだ戦えると立ち上がってここまで来られたのです。その自分を忘れないでほしい。その自分に自信をもってこれから生きていってほしい。そのように願ってやみません。

さて、皆さんが取得したものは、単に学位だけではありません。極端なことをいえば、学位記なんぞというものは、紙切れに過ぎません。修士号または博士号という学位を皆さんが得たということは、それに伴う責任を負ったことを意味します。その責任とはなんでしょうか。その最も重要な一つは、「何が大切かを、自分の頭で濃密に正しく考え

る責任」であると思います。

9年前も、そして今も、危機に直面して政治が迷走しています。政治の劣化は、こんにち日本のみならず、世界的にも顕著になっているわけですが、危機的な状況の中で、それはますます明らかになっています。劣化の要因はさまざまにあります、その重要な一つは、ほんとうに何が大切なのかをじっくりと自分の頭で考えて行動する能力と資質が、政治の世界で著しく欠けているということにあるのではないかと思います。そして、この政治の世界での欠落は、我々が生きている「社会での欠落」の鏡でもあります。この社会での欠落をより明確に言えば、それは「反知性主義」の蔓延だといえるでしょう。

自分の頭で考え、調べ、また考えてコトバにする。それを通じて、世界のかかえる問題の複雑さと不条理さに気づき、もつれた糸を解きほぐし、問題の核心に迫る。これこそ、皆さんが自らの研究の過程でこれまで試みてきたことです。その結果、皆さんは、反知性主義に抵抗して戦う能力を体得されたのです。能力を得た者には、それに相応した責任が課されるものです。すなわち、反知性主義に抵抗する責任を皆さんが負ったことを意味するのです。学位を得て、やっと一息ついたところなのに、むごいことを申し上げて恐縮ですが、皆さんの知的な新たな闘いが、今日から始まるのです。

修士、そして博士として早稲田を飛び立つ皆さん。どうか、早稲田で噛んだ砂の味を忘れないでください。その試練を乗り越えた自分の姿を忘れないでください。そして政治学研究科という知のアリーナで得た能力を自覚して、地球社会で反知性主義に対する新たな闘いに臨んでください。もちろん、時に無力感に苛まれることもあるでしょう。でも、皆さんは一度はそれを早稲田で乗り越えてきたはずなのです。

最後に皆さんの門出を祝い、とびきりの大声で申し上げます。

ほんとうにおめでとう!!

2020年3月25日
政治学研究科長
田中孝彦